

青髭 1 9

明宏訊

遅すぎる夕食、いや、夜食というべきか、それを終えてひと山ほど越えると朝霧の中に巨大な影が現れた。目を凝らせば、幾本からの尖塔の影から、それが峻厳な山々に囲まれた堅牢な城であることが旅人たちにも提示される。

ギョイエンヌにある城は単純にその名のとおりギョイエンヌ城と呼ばれている。王都ナルボンヌにある王の居城、メルヴェイユとは偉い違いである。諸侯たちは自分たちの城にそれぞれ気に入った名前を付けることが300年前くらいに流行った。当時のギョイエンヌ従子爵はその例に漏れたらしい。

だが、いざ軍事的な備えとなるとナント王国内の貴族の城でも群を抜く。

対魔法対策、対物理兵器対策が長年の歴史の中で十分に施されていることが、遠景からでもわかる。

「…しかし、ナルボンヌの人たちはああいいう無骨なものを退去させることを、お大名方に望んでおられるみたいですね」

伯爵は朝日を身体ぜんたいに浴びながら言った。アンリは、ナルボンヌの人たち、という言い方にぎよっとなった。ギュスターブ・ペリゴールには通じまいが、それがピエール4世を筆頭とする王家と、その取り巻きたちを示していることはあまりにも明解だからだ。家臣は返答にしばらく窮した。

「長い歴史を経て、あれらの外部対策はすでにわが城の意匠とでもいうべき存在ですよ、わが、愛おしい人」

もちろん、大変に家来思いの主君に対するせめてものあてつけである。

今度はギュスターブ・ペリゴールがぎよっとなる番である。彼は二人の詳しい仲を、たとえ、それが虚報であっても知らされていないわけだから、想像をたくましくする以外に方法はない。

新しい家来は顔を赤らめた。

それを見て、からかってみたくなるくらいの余裕はアンリにも残っている。

「ギュスターブ、そなたにもかわいい人くらいいるのだろう？」

「そ、そんな、こんな自分に……」

長顔の少年は馬上で完璧に固まってしまった。その様子を視野の片隅に固定しながら、アンリは主君に本題に戻るように促す。

「ギュスターブ、あれがわが城だ。どんなものだ？」

「へーい、私などに何も言えるわけがありません……」

顔を赤らめて恐縮する少年に、アンリはにこりともせず主君に視線を移す。

まだ、さきほどの会話を引きずっているようだ。伯爵は伯爵で、アンリの話の持って生き方にもどかしいものを感じたのか、常に冷静な殿様がさすがに苛立っているようにみえる。多少なりとも鼻のかかった、演技の色が見え隠れする声がアンリの耳に針を刺す。

「先方に知らせているのですか？こんな時間に来訪するのは、さすがに失礼では？」

「……」

家臣を無視しているわけではないが、何かに注意を取られているようには見えた。主君が注意を払っている正体を家来はすぐに悟る。

アンリは聞きなれた声を聴いた。それはあたかも過去から響いてくるように思われた。主君の側に控えていながら、家来としてあるまじきことながらそちらへの注意を、あくまでも一瞬にすぎないが、失ってしまった。

聞きなれた声の根源には、ギョイエンヌ家の三男であるギョームが長髪を朝風に靡かせていた。もちろん、馬上である。だが、一騎であることに懸念を抱いた。彼のような身分ではありえないことだ。それでも内心を押し隠して務めて明るい声をかけた。

「ギョーム！こんな時間にどうした？しかも伴もつれずに？」

「あ、兄上こそ、このようなお時間に、それもこの方々は？どちらです？」

「お初にお目にかかります…わたくしは、アネモーネ・ド・ヴァロアといいます」

「ギョーム？」

アンリは言葉を失った。当然といえば当然なのだが、彼はギュスターブが平民でないことを見抜いている。それが「方々」という言い方になっている。それにしてもさすがは伯爵、おそらく彼にとってみれば能力は全方位で不意打ちではなかったのかもしれないが、アンリの弟に対して魔法を通して。要するに17歳の美少女の体を維持している、ということだ。

それにしても、ヴァロア家とは何とも適当な家を選んだものだとアンリは感慨させられた。ナント王国内では大したことなくても、カルツカソム伯爵領内では名門、という立場はギョイエンヌ家とそれほど家格として変わらない。もちろん、伯爵家とは主従の関係にあるが、詳しい系図などはまだアンリの頭の中に刻印されていない。

それよりも、ギョームの態度だ。あきらかにおかしい。

「ギョーム？」

しかし、ギョイエンヌ従子爵は、あの、万事において控えめな弟の顔に尋常ならざる色を見つけてしまった。それは、アンリが従子爵家を継承するに当たって示した感情とは別種だった。

その証拠に、ギョームは固まっていまい、ある方向に視線を固定している。その線は、あたかも光っているかのように見えた。おそらくは光線と表現するのが適当だろうが、それは彼らの主君の顔に当たっていた。

「ギョーム！」

「は、兄上？」

「何を考えているのだ？とにかく、我々は長旅で疲れている」

「はい、とにかく、城に……」

夢うつつな弟の真意を兄はなかなか洞察できなかったが、それは彼の能力や経験不足のいかんではなくて、本当は答えらしきものを掴んではいたのだが、理性ではなく感情レベルで受け取りがたかったからだ。

「まさか、そなた……」

「ハ、兄上、さ……」

礼儀上、女性にどうやって接したらいいのかわからず、ギョームはただ手を向けただけである

。それで、城に招いているつもりなのだから、アンリは思わず頭を抱えた。伯爵の美貌を盗み見してみると、彼は、会釈するだけだった。ちらりと青い目が動いた。彼は目で何事か話しかけてきた。

……かわいらしい弟さんじゃないか？

優しげな微笑から主君はそう語っているらしかった。しかし、それがギョイエンヌ家の三男坊を籠絡しているのがわからないのだろうか？わかっていて、やっているのだろうか？いや、あながちそうとも言えぬ。二人の父親が遺した『日記』によれば、両者の主君を政戦両略の天才と評しているが、天才には意外なところで抜けているところがある、と但し書きがあった。

まだ、伯爵を主君と仰いでからそれほど時間が経過していないにしても、冷徹な政治家たる彼にそもそもそのような言い方、いや、評価する、という姿勢そのものが正しいのが疑問を抱かないでもない。

恣意的なのか、それとも天然なのか、伯爵は馬上でしなを作る、ではないが、少なくともギョームに対して好感を、いや、少なくとも悪印象は抱いていないという微笑を浮かべて答えている。明らかに弟は誤解しているのだ。

それには、兄も加担していないといえは嘘になる。正式なところ、新しいギョイエンヌ従子爵に正式な婚約の相手は、表にも裏にもいない、ということになっている。それゆえに、ギョームは自分に可能性があると考えている、とアンリは想像している。

朝まだき、おそらくは母上たちも寝具の友人となっているにちがいない。それにもかかわらず、「起こしてまいります…」などと、ギョームは完全に舞い上がった受け答えをしている。

そもそも、だ。この女性は何者なのか、兄に対して質問するのがふつうではないか。普通の彼ならば気を使って、ということもありうるが、ちなみに、二男のルイに至ってはそのような細かい神経の使い方とは完全に無縁であろう、とにかく、いまの彼は間違ってもそのような状況ではありえない。

馬を厩舎に、ギョームはみなを招き入れる。

ギュスターブ・ペリゴールがみなを馬を預かろうとする。

アンリからすれば変な気持ちになるが、正式にはともかく、じっさいに、この城の主は彼らの母たるアデライード・ド・ギョイエンヌなのである。このような場面であれば、城に居住するギョームがそういう役割を果たすのがふつうだろう。アンリはその点においてはまったく拘らなかつた。いまだに、自分はこの地を出奔した、という過去を忘れたわけではない、もっとも、いま、ギョームはべつの理由でそれを記憶から一時的に消失しているにちがいない。

これは笑えない事実である。

果たして、厩舎のなかではやけに筋肉が発達した偉丈夫が馬のしんたいを磨いていた。我が家にそのような従者がいたろうかと目を凝らしてみると、それはルイだった。頭部以外、身体のあらゆる部分を鋼鉄の鎧で覆っている。

相手を攻撃するにせよ、自身を防護するにせよ、青い血の貴族は必ずしも筋肉などというものを必要とない。だが、腕っぷしに青い血をもっとも発揮するルイのようなタイプは例外といえよう。

「ルイ、相変わらず身体の研鑽を欠かさないようだな」

「ぬ？兄上？え？」

二重に驚くことはギョームと変わらないが、少なくとも、弟のように底なし沼に陥るようなことはないようだ、兄は安心した。それと、ギョームと違ってルイはギュスターブに対して一瞥もくれなかった。彼は従者としての仕事に励んでいる。

伯爵はさきほどギョームに対してした挨拶を、今度は下馬して行った。それはルイが地面に足をつけている故だが、それは同家格の貴族として当然の礼節である。

それにしても……と懸念を抱かざるえない。ギョームだけでなく、ルイ、そして、当然のことだが、アンリまでいる。三人を相手に魔法を使っているのだ、カルッカソム伯爵ほどの貴族ならば造作もないことかもしれないが、ナルボンヌに対する影響が気になる。

伯爵家の家老職を拝領しているものとして、言上申し上げなくてはならぬ状況だ。

だが、伯爵はルイとの会話を楽しんでいる。

「貴族のあるべき姿を具現なさっているのですね。わたくしの従者とは天と地の違いですわ」

「いえいえ、ギョイエンヌ従子爵家に生を受けたものとして当然のことです」

ギョームのアネモーネ・ド・ヴァロア、もとい、伯爵に対する態度と違うが、ルイもまた兄にとってみれば意外な態度を示している。

最初は、その想像を絶する美貌に言葉を失ったものの、これほどまでに女人に対して自然に接することができるのは、こと、ルイに限ってみれば予想外としかいいようがなかった。

いや、それよりも二人の会話が、さらにアンリの想定を超えた方向に進んでいく、それを何もできずに眺めることしかできない自分を情けなく思うことである。

「まだ母は就寝中ゆえに失礼します」

「いえ、このような時間に訪問した、わたくしこそ礼儀知らずとそしられても何も言えません。ところで、空が完全に白むには時間が必要ですね。失礼ながら、あなたさまのオーラをお見受けしたところ、かなりストレスが溜まっているように思えます。僭越ですが、わたくしがお相手しようかと……」

そのとき、かなり高い確率で伯爵は家臣が自分のことを「伯爵！！」と怒鳴ることを予想していた。それゆえに、機先を制するというまえに厳しい視線でにらみつけたのである。そのために言葉を聞き終わっても、なお、言うべき言葉を見つけられなかった、頭の中は、自分の主君がいったい、何を考えているのかと、何乗分もの疑問符でいっぱいになっていたにもかかわらず、だ。